



読みに困難がある子どもの個別の実態把握と指導プログラムの立案

教育学部児童教育学科 教授 今中 博章

キーワード

小学生、読み困難、実態把握、指導立案

該当するSDGs

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



1 研究内容

読みに困難がある子どもの研究をしています。文字を読む、文章を読む。難なくできる人からは想像できないかもしれませんが、実はすごいことなのです。一方、読みに困難がある子どもに目を転じると、例えば、目から、耳から入ってくる言葉や文字に関する情報を処理する以前に、言葉や文字のもとになる情報をうまく処理できずに困っている子どもがいます。読みに困難がある子どもといっても、その理由はさまざまです。したがって、一人ひとりのつまずきの状態と理由を正しく把握したうえで、それらに合った指導プログラムを立案することが大切になります。また、読むという活動は学校においては、国語の時間のみならず、あらゆる授業場面、学校生活場面に含まれるので、早めの予防的な対応が必要です。小学2年生の夏前ぐらいの時点でひらがな拗音(きゃ、きゅ、など)で読み間違えがしばしば見受けられる子どもの場合が、これに該当することが多いように経験的に感じています。

2 連携可能性のある研究分野, 又は, これまでの連携実績

連携可能性のある研究分野

- ・読みに困難がある子どもの個別の実態把握と指導プログラムの立案にご協力できる可能性があります。

これまでの連携実績

- ・福山市巡回相談員(特別支援教育、福山市教育委員会派遣)